



教職員配付資料

重要

- 1 全ての学級で取り組む
- 2 全ての教科で取り組む
- 3 九年間継続して取り組む



大口の子どもはチーム大口で育てる

「大口学びスタイル～学びの方針～」策定の趣旨

- 「大口の子どもはチーム大口で育てる」ため、「授業」の視点から、小中学校が一貫して取り組む基本方針を示したものが、「大口学びスタイル～学びの方針～」です。
- 「大口学びスタイル」は、「児童生徒の主体的な学び、対話的な学び」を重視し、「深い学び」を保障する授業を目指して、4小中学校の教室において取り組もうとする基本方針を示しています。今、各教師が対面する目の前の子どもたちが進級したり中学校に入学したりした時、共通の学びの基盤が整っていることは意義のあることです。
- 「大口学びスタイル～学びの方針～」は、“意識の徹底”を特徴としています。例えば、相手意識が伝わるように、話を聴くときは顔を相手に向ければよいものではあるが体を向けるとし、相手を見ながら話せればよいものではあるが全体が見渡せるところに移動することを促しています。こうして学びの基盤を整えようとしているわけです。全てのやり方を揃える必要はなく、本質は、必要があれば自ら動く子を育てたい、という思いに他なりません。
- そもそも、学びは個の中で生まれます。しかしながら、仲間と切り離された学習に学びは生まれません。児童生徒の主体的な学びを力に、仲間との対話を足場として、個々の学びが深い理解につながることを目的としています。
- 各学校、各教員は、学校の特色や児童生徒の発達段階に応じた取組を講じていくことはもちろんですが、4小中学校の共通方針としてその意義を鑑み、共同してその実践、並びに工夫改善に取り組んでいきたいと思えます。

「大口学びスタイル」で目指す子ども像

- 学びに向かう子
- 自分の考えをもつ子
- 他者の考えを受容する子
- 考えを練り上げていく子

「大口学びスタイル」のもとで行われる授業像

- 児童生徒の主体的な学びを重視する授業

学びに向かう力を育成するために、問題解決型・探究型授業を積極的に展開します。

- 対話的な学びを重視する授業

学習のねらいに応じて「発表する、話し合う、練り上げる」など対話を基盤とする活動を組み込みます。

- 深い学びが保障される授業

教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断・表現する授業の流れを大切にして、学

習内容の深い理解につなげます。

大口学びスタイルの具体1

学びに向かう力を支えるために

価値付けをする

少しでも伸びたところを認め、伸びようと努力していることを認めることで、子どもの自己肯定感を高めていきます。

ルールを徹底する

ルールが存在する意味、ルールを守ることの意義について、発達段階に応じて考えさせ、ルールを守って行動する子を育てます。

安心感を築く

学級の一員として、誰からも大切にされている、何でも聴いてもらえると実感できるような学級経営を心掛けます。「まちがえてもいいんだ。まちがいに気付いたら、それを正していくことが大事なんだ」と思えることが学びの意欲となります。

大口学びスタイルの具体2

対話のある学級集団を築くために

相手意識を高める

学びには他者が必要です。学級内において、対話する他者とのよりよい関係を築くためには、相手意識が求められます。相手を認め、尊重する意識と態度を養うための具体策を示します。

ア 授業始め・終わりのあいさつは、係または先生が前に立って行う。

イ 正対を取り入れる。

ウ プリントを配付するときは、一言添える（「どうぞ」「ありがとう」）。

エ 目的に応じた座席隊形を工夫する（一斉型、コの字型、グループ型など）。

オ 必要があれば、全員が見渡せる位置に移動して話す。

聴き方・話し方を整える

話すことで自分の考えを他者に伝え、聴くことで他者の考えを受容する、そして、自分の考えを練り上げていくために、聴き方、話し方を整えることは重要です。そのための具体策を示します。学年の発達段階に応じ、工夫改善をしながら取り組んでいきます。

聴き方

「聴く」とは、相手の考えや気持ちを受け取り、理解することです。そのために必要となる態度や姿勢として、次のようなことを身に付けます。

- ア 体を向けて、相手の考えを聴くようにする。
- イ 顔を見て、相手の考えを聴くようにする。
- ウ 反応しながら、相手の考えを聴くようにする。
- エ 最後まで、相手の考えを聴くようにする。

話し方

「話す」とは、自分の考えや気持ちを受け取ってもらい、理解してもらうことです。そのために必要となる態度や姿勢として、次のようなことを身に付けます。

- ア 伝える相手の方を向いて話す。
- イ 教室の一番遠い相手に声が届くように意識して話す。
- ウ 相手の反応を確かめながら話す。
- エ 相手が理解、納得しやすいように、根拠を示して話す。



【聴き方】



【話し方】

大口学びスタイルの具体3

学習内容を深く理解できるようにするために

本質的な問いを探究する

深い学びには、本質的な問いが必要です。本質的な問いとは、教科の本質に沿った、常に問い続ける価値がある問いです。教師自身がしっかりと教材研究して、問う内容を考え、吟味します。

学習課題等を明確にする

学習課題等を明示することは、授業のねらいを学習集団として共有し、主体的・対話的な学びを生み出すために必要です。そのための具体策を示します。

- ア 児童生徒が何をすればよいのかを理解できる言葉で提示する。
- イ 視覚的に捉えさせるために、課題カードを用いたり、板書を赤線で囲んだりする。

ウ 聴覚的に捉えさせるために、学習課題等を声に出して読む。

授業展開を意図的に構想する

学びは個の中で生まれます。そのためには、一人一人が、学習課題に対して、自分の考えをもち、それぞれの考えを交流する中で、学習内容について整理されたり、理解が深まったりできるような授業展開が大切です。学んだことを振り返り、その過程や成果、変容などを児童生徒自身が自覚し、自分の言葉で説明できることも大切です。授業の流れを全員で丁寧に振り返り、何を学んだかという視点で自分の学びをまとめさせます。

学習過程

一人学び、みんな学び、自分学びといった学習過程を基本形として示します。

《学習過程のポイント》

① 一人学び

- ア 生活・学習経験を想起させ、問題意識をもつような問いを発する。
- イ 自分の考えをもつための時間を保障する。

② みんな学び

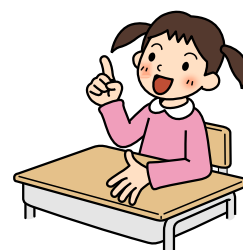
- ア 自分の考えを発表したり、深めたり広げたりする話し合い活動の場を積極的に設ける。
- イ 話し合う目的（何をはっきりさせようとするための話し合いか）を明示する。

③ 自分学び

- ア 授業の最後に学習したことを振り返る活動をしっかりと行う。
- イ 振り返りの視点や書く内容を明示する。

PDCAサイクル

各校、各教職員は、本方針の理念や意義を踏まえ、研究実践を積み重ねる中で、より効果的なスタイルの具現化を目指します。そして、その成果が互いに交流され、工夫改善に努めていきます。



家庭学習の充実に向けて

① 家庭学習について教職員が共通理解を図る

発達段階に応じた適切な家庭学習の在り方について、共通理解を図るとともに、出し方や内容、量について、教職員間で適切に調整することが必要です。中学校は教科担任制であるため、例えば、教室や職員室で「家庭での学習課題を可視化」し、その内容や量を日常的に調整するような仕組みも有効です。

② 家庭と学校との協力体制を構築する

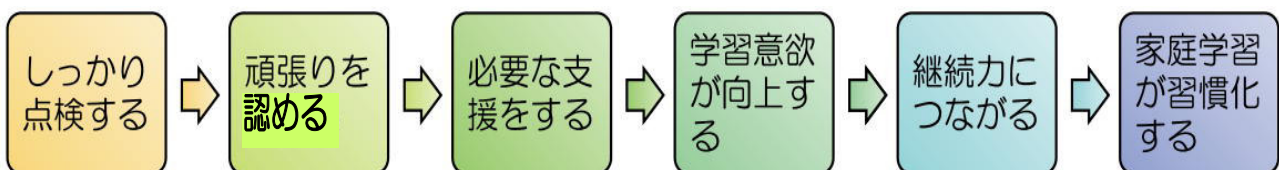
PTAの協力体制の強化や通信を活用した保護者への情報提供を行い、学校と家庭との役割を理解して児童生徒を支援する体制を構築することも大切です。

<主に学校の役割>	<両者の役割>	<主に家庭の役割>
<ul style="list-style-type: none">・分かりやすい授業・適切な家庭学習課題・点検、評価の工夫	<ul style="list-style-type: none">・自主的、主体的に学ぶ態度・計画的に取り組む力・粘り強くやり遂げる力	<ul style="list-style-type: none">・基本的な生活習慣・個性に合った支援・自らを律する心

③ 児童生徒のやる気を支える「点検・評価の工夫」が重要

家庭での学習習慣は、自然に身に付くものではなく、学校や保護者の適切な指導や支援の下で、徐々に身に付いていくものです。そこで大切なのは、点検や評価を工夫することです。機会をとらえて適切に言葉をかけたり、シール、スタンプ、朱書きなどで頑張りを認めたりすることは、児童生徒への大きな励ましとなり、継続を支え、家庭学習の習慣化につながります。

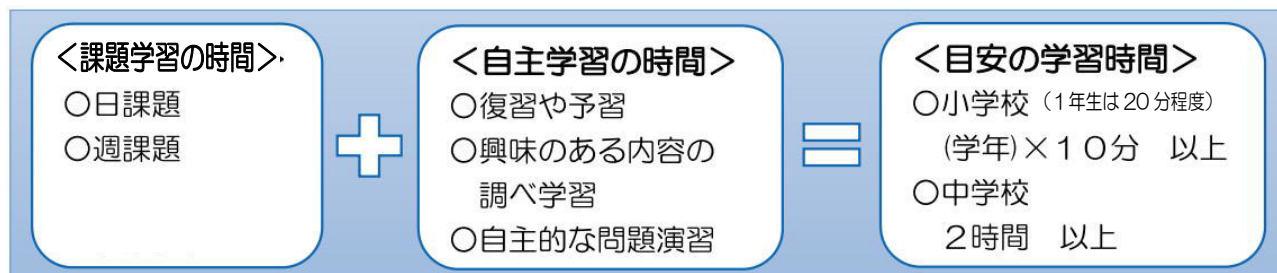
また、点検や評価を通じて、児童生徒一人一人の習熟の状況を把握し、日々の授業での指導に生かし、基礎的・基本的な内容の定着を図っていくことも重要です。



④ 目標の家庭学習時間が達成できる「内容と量」を考える

毎日取り組む習慣を身に付けさせることも大切です。そのためには、家庭学習の内容と量を考える必要があります。また、授業の復習だけでなく、学期や学年を越えた復習を意図的に盛り込むことで、知識の着実な定着につながります。

家庭学習にかかる時間は、児童生徒一人一人によって大きく異なります。児童生徒の実態に応じて、最低限すべきことと、自主学習を含めた意欲的に取り組むべきことの優先順位を明確にするなど、個に応じた工夫をすることも大切です。



⑤ 「自ら学ぶ力」の育成の観点から自主学習を計画的に取り入れる

生涯にわたって生きてはたらく「学びに向かう力」を育むためには、自ら学ぼうとする意欲と習慣を身に付けることが大切です。そのための手立てとして、自主学習を意図的・計画的に取り入れます。自主学習は、小学校低学年から計画的に取り組ませることで習慣化を図ります。

自主学習の質を高めるには、よい取組例を紹介したり、授業で自主学習ノートを作る練習をしたりして、モデルを示すことが有効です。また、学年で何を、どの程度まで行うのかしっかり話し合い、学校全体で共通理解し、組織的に指導していきます。



2023. 4. 1版